

# 葉と嘘の暗号 最終回

前回までのあらすじ

大学の図書館カウンターでアルバイト中、  
花の絵が描かれた葉と暗号のようなメモを見つけた二人は……

「ほら、これだろ？」

画面には、メモに書かれていたものと同じ長いタイトルが、一件だけ表示されていた。

「サイニー……リサーチ？」

「ああ。日本国内で発表された論文を調べるなら、このデータベースが一番おススメかな。この図書館にどんな雑誌があるかどうかはOPACを調べればわかるけど、どの雑誌にどんな記事、どんな論文が載っているかはOPACじゃわからないから、そういうときは論文用のデータベースを使うんだ」

「で、この論文はどこにあるんですか？この図書館にあるんですか？」

「焦るなつて。これが論文タイトルで、その下が著者名、雑誌名、数字は巻号とページ数と出版年」

先輩が指さした画面上の数字に見覚えがあり、手元のメモと見比べる。同じだ。暗号のようだった数字の並び

が、急に意味を持ったみたいに感じる。

「ほら、ここに弘大蔵書検索へのリンクがあるから、ここからOPACを開いて、雑誌のタイトルと、所蔵巻号と、配架場所を確認して……」

「第二書庫つすね！行ってきます！」

「あ、第二書庫は雑誌タイトルのアルファベット順に並んでるから、探すときは気を付けないと……」

先輩の声を背後に聞きながら、カウンターを飛び出すように走り出……そうとして、早歩きに切り替えた。

アルファベット順、アルファベット順。大丈夫。前にも探したことがある。ええと、まずは雑誌タイトルを頭の中でローマ字表記にして……

\*\*\*

「葉しか無かったんですけど!？」

「おつかれ〜」

憤懣やるかたない思いでカウンター

ーに戻ると、先輩は四枚目の葉を受け取って、デスクの上、他の三枚の隣に並べた。

決して走らず急いで歩いてそして周囲に気を配りながら第二書庫の階段を上り目当ての雑誌のその論文のページまでたどり着いたが、挟まっていたのは葉だけで、他には何も無かった。

「なんなんですか？これで終わりってことですか？」

この葉と暗号は、いったい何だったんだろう。

「これで終わりってことだよ」

四枚目の葉に描かれていたのは、紫がかかったピンクの花だった。花びらの付け根の部分だけが少し白っぽい。

「オシロイバナ、ツバキ、カミツレ、レンゲ」

先輩が、葉を指さしながら花の名前を言う。そんな名前の花だったのか。知らなかった。というか、なんで先輩

はわかるんだろう。

「オ、ツ、カ、レ！」

ニヤニヤと笑う先輩の顔を見て、急にすべてが腑に落ちた。

「これ、先輩が仕組んだんですか!？」

「うん。マニュアル読んで覚えるより、ゲーム感覚で実際にやってみての方が覚えやすいかなつて」

「そ、そうすけど……」

確かに、ちよつと楽しかったのは否定できない。それに、新聞記事の探し方や、論文の探し方も、次からはきつと自分一人でもできるから、その点は少しか感謝したい。

けれどこのまま終わるのは少し……癪だ。

「じゃあ次は私が問題を作りますから、先輩が探してくださいね？」